

大通公園を望む窓辺から

予想よりも忙しい

常任理事 後藤 聰

今月に入っていったい何回目の札幌の往復だろう。早くも、北海道医師会に關与して6ヵ月が過ぎた。

40年以上も病院勤務を続けて、70歳で定年になった。そのまま名誉院長の称号と常勤嘱託医として、勤務をする場所は与えられた。しかしとにかく気が抜けたような感じとなった。

このままではどうなってしまうのだろうと不安になっているときに、北海道医師会からのお誘いを受けた。忙しくなることは分かってはいた。あえてお受けした。

“ただでさえ落ち目のゴルフの機会が少なくなるよ”という忠告が一番身に堪えた。確かに、私の腱鞘炎のこともあったが、ラウンドの機会は激減してしまった。せっかく再開した、ギターの練習もしばらくは滞っている。

私の前任者が月に9回札幌を往復したことがあると言っておられた。実際は、そんな生やさしいことではなかった。札幌往復が10回を越えるのはザラである。その他に地方都市への講演会の司会、厚生局の指導等の立ち会いという仕事もある。

ただ、間違いなく良い経験をさせてもらっている。いやだ、嫌いだと感じているのでは、こうはできない。しかし、体と気持ちに負担が多いことは確かである。

病院に迷惑をできるだけかけないようするためには努力も必要だ。札幌宿泊の早朝に札幌から旭川に帰り、病院に出勤して、夕方また会議で、札幌・旭川間を往復するというのも何度かあった。

幸い今のところは、健康だからなんとかなっている。

ただ、本来は私のような、高齢者ではなく、若い人が、この仕事をして、医師会とか医療制度を考えるべきだと思う。しかしそれには、本来の診療との兼ね合いが難しいのだろう。

とにかくせっかく与えられた機会を有効に活用したいと思う。さして重要なポストにいるわけではないが、私なりに頑張ろうとしている毎日である。

祖父の論文から見えてくる 地方医療

理事 古屋 聖兒

明治21年、網走管内紋別郡の初代村医として赴任した祖父古屋憲英は、明治23年発刊の日本醫事新聞に「陰唇象皮病實驗」と題する論文を発表した。当時としては先進的なクロロホルム麻酔を行い、約10kgという巨大な腫瘤を摘出した、アイヌ女性の症例報告である。

手術には、網走と斜里の村医渡辺貞次郎と山内英司が介助したと記載あり。当時オホーツク地方の医師はこの三人だけで、論文からは、彼らが協力しあって地方住民の生命を守るために奮闘している様が、よく見てとれる。

さて、この当時、道庁は官費節減のために官立病院を閉院して、それに代わり補助金を交付して村立病院に移管する方針がとられた。まるで現在、赤字が累積する道立病院に対して、統廃合や民間移転、指定管理者制度を持ち出す昨今の行政の姿と同じであることに驚かされる。彼ら村医の俸給は国からと村からも補助され、住宅と医務所は民間の寄付で、薬代などは村医の所得になった。

こんな話が残っている。前述の山内医師に關し、道庁の役人から村長宛に薬代などが不当に高いと照会があったが、村長は「汽船の便が悪く、時に馬で運ばなければならないので不当に高いものではない」(斜里町史)と、医師の肩を持つ弁明をしている。このように、地域の医師を確保するため、地方の民間は身銭を切って官の足らざるところを補っていたのだ。

ところで過日、道南の某町で医師の大量辞職の危機がマスコミで報道された。医師側と行政側の間で意思の疎通と信頼が欠けたためらしい。ぜひ医師、行政ばかりでなく住民の三者が、地域医療を守るということをお大前提にして話し合い、問題解決するよう願っている。

祖父の論文は、「(患者の)喜情挙動二現レ一回ノ叩頭ハ實ニ余ニ満足ヲ与ヘテ帰宅セリ」と結ばれている。この満足感こそ、地方医療人の醍醐味である。

